

■ 第 1 回専門委員会①における主な意見

- 審議事項：現計画期間中の主な取組み、現状と課題
- 開催日：令和 6 年 5 月 15 日（水）
- 出席委員：会長・谷口初美（福岡女学院看護大学副学長）、副会長・門田理世（西南学院大学教授）、（敬称略） 柿迫重正（福岡市私立幼稚園連盟会長）、金山ふみ（労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団九州沖縄事業本部 副本部長）、高木雄作（福岡市私立幼稚園 PTA 連合会会長）、中山英樹（福岡市医師会常任理事）、松本みほ（福岡市保育協会 副理事長）

【主な意見（要約）】

[施策 1] 母と子の心と体の健康づくり

- 「母と子の心と体の健康づくり」とあるが、妊娠前の女性を含めた家族と子の心と体の健康づくりとして考えていく必要がある。低出生体重児などの問題は、妊娠前の女性の健康づくりから始めないと未然防止できない。
- 働き盛りの女性が子どもをつくろうとするときには妊娠が難しくなっていることが多く、出産に適した年齢をどうして教えてくれなかったのかという声が多い。女性には出産適齢期があることを認識し、それまでに身体を整えることが重要。
- 男性にも出産に適した年齢があることを同時に周知すべき。不妊は女性に問題があるという誤った印象を与えてはいけない。
- 不妊・不育専門相談センターについては、名称や広報媒体を工夫して更なるアピールをしたほうがよい。

[施策 2] 幼児教育・保育の充実

- 幼稚園や保育園で特別な配慮を必要とする子どもが増えており、保育士不足にシつけや病気、発達発育で悩んでいる保護者も増えている。

[施策 3] 身近な地域における子育て支援の充実

- 体重が増えない、うまくミルクを飲めないといった 0 歳児が以前より増加しており、子育ての相談ができない人が増えているのではないかと感じる。
- 子育てについて学ぶ機会や知るチャンスがないまま育った世代が子育てをしている。現状を丁寧に見た上で、必要な支援を考える必要がある。
- 子どもプラザで支援に携わる中で、若いお母さんが自分の子にどう関わっていいかわからない、ミルクの作り方も調べれば分かるのにそこまでたどり着かないという現状がある。コロナもあり、地域関係がさらに希薄化する中で、子育ての情報が全家庭まで届いていないと感じる。
- プレパパ同士のつながりも重要。プレパパのイベント情報などを SNS で発信してはどうか。

- コロナ禍に加え、スマホの発達もあり、子どもとの関わり方が変化し、子どものことを理解できなくなっている要素もあるのではないかと感じる。
- 小児科学会では、2歳まではできるだけメディアに接しないことを推奨している。どうしても必要な時はスマホを見せても構わないが、いつどのように見せるかは親がしっかりコントロールすべき。
- 育児中に誰にも相談できず孤立してしまうのが一番辛く、負のスパイラルに入っていく可能性もある。幼稚園の未就園児教室や子どもプラザなど、親子同士でふれあいや相談ができるところを増やし、積極的に情報発信していく必要がある。

[施策4] 障がい児の支援（乳幼児期）

- 親が子どもの発達の遅れに早期に気づくという観点からも、子育ての相談がしやすい環境は重要である。

[施策5] 子育てを応援する環境づくり

- 核家族・共働き世帯が増える中、母親にとって子育ては大変な状況。育休中の母親は孤立しがちで、社会から取り残されたように感じ、早く社会に出たいという女性が多い。子育て情報をどう伝えていくかが課題。今は上の世代に聞くのではなく、スマホで調べる時代であり、SNSで発信してはどうか。

[その他]

- 当事者意見の聴取については、保育園で働いている保育士、幼稚園の先生にも聞く機会を設けてほしい。